



TITLE:

(随想) 泌尿器科医を決心するまで

AUTHOR(S):

重松, 俊

CITATION:

重松, 俊. (随想) 泌尿器科医を決心するまで. 泌尿器科紀要 1957, 3(1): 1-2

ISSUE DATE:

1957-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111404>

RIGHT:

泌 尿 器 科 紀 要

第 3 卷 第 1 号

昭和 32 年 1 月

随 想

泌尿器科医を決心するまで

久留米大学教授 重 松 俊

1932年学校を卒業した私は一体何科を専門としようかと随分迷った。郷里の家が代々開業医で、亡父が老齢であつた故余計に苦しんだ。私は学生時代より解剖学特に組織学に興味を持ち、当時九大より講師として出張せられて居た故石沢先生より大変可愛がられて居たので、先生の教室に入る決心をして居た。処が丁度其頃先生は長い御病床にあられたので、一応お断り方々御見舞に伺つた。先生は基礎学をやるのは余程の経済力と根気がいるし、臨床家になるのもいい事だ。好きな科目を一生懸命勉強し給え。身体に充分気を付けてね。とやさしい御言葉を頂いて帰宅した。亡父は入学する時好きな科目をやつてよろしいと言いながら、卒業する頃は臨床家になつて貰い度いと云うし而も内科を選ぶ様にとすすめるので益々困まつた。私が内科を選ぶならば田舎に帰えらなければならぬ様になるだろうし、其上内科は広汎でそれを修得するのに困難であるから等の理由を作つて亡父に内科専攻を断つた。それで当時学生間で一番人気のあつた布施四郎先生の教室に御厄介になる事に決心した。教室は皮膚泌尿器科学と言う事であつたが、私は泌尿器科は余り好きでなく、専ら皮膚科に興味を持つて居た。其後1935年皆見省吾先生の学徳を慕つて、九大皮膚科学教室に御世話になつた。同時に教室の関係上、泌尿器科学教室の故高木繁先生にも種々御指導を頂いた。

其後1940年4月より二、三の地方の公立病院に勤務し、此の際には皮膚科及び泌尿器科の両科をやつた。1949年より現在の久留米大学に勤務して居るのである。赴任当時より学問上両科を兼務するのは困難である事を痛感して居たのであるが、当時両科を分離独立する状態になかつたし、自分自身としても何れを専攻するか迷つて居た。私は皮膚科出身であるが、手術に対しては人一倍興味を有するものであつたからである。処が1954年の暮には両科が分離出来る機運になつたので愈々決心をしなければならなくなつた。毎日苦悩の日が続いた。私の性質と諸種の事情により泌尿器科学を専攻する事に決心した。或人は泌尿器科学がいいと云うし、又或教授は年老いて新しい学問を初める事に大変同情もして呉れた。或者は私に泌尿器科をやらせるのは或一部の教授等が私を迫出す手段だと言つて呉れた者も居た。私は迫出すなら迫出されるまで頑張ろうと答え、又田舎の大学は之だからいやになるとも答えた。愈々そう決まつて見ると、人間誰れしものであろうが、私は皮膚科学に未練があつた。自分で買った書籍の大半は皮膚科学で、泌尿器科学の書籍なんていうのは僅少しかもつていないのである。一冊一冊の皮膚科の書籍にさえ愛着がある。乏しい俸給から外国書を購入して居たので思出が多いからである。然し一度決心していつまでも未練がましくあつてはならない

と、自分を励まし、その後2ヵ年を終た今日ではもうすっかり皮膚病の病名さえむづかしい名のついたものは忘れてしまつて居る。いや忘れる様に努力したと言つた方が適當であるかも知らない。私は現在20代の学生の積りで勉強して居る。内外の書籍、雑誌類だけ読むにしても両科を兼務する事は到底人間業では出来ない。大学と云う処は公立病院の様にただ患者を診療するだけの場所ではない。学問する即ち研究する所が大学であつてみれば、全然内容の異なる両科を一緒にすべきでないのは分り切つた事であるのにと、愈々自分が分離してみれば明確になつて来たのである。外科と一緒にならば幾分分る気もする。もつとも独乙あたりでも現在 Urologie は外科の一つの Abteilung としてあるのが多く、恐らく独乙で只一個所であろうか Soor の Alken 教授の教室は独立して居る (Urologische Universitätsklinik) ようである。

今後私達の様に分離した大学に居る者は未だ然らざる大学の方に応援して一日も早く分離される様にしなければならない責任があると同時に、地方病院に於ける両科の独立を促進させなければその中心となる若い医師は絶対に困る事である。少なくとも皮膚科泌尿器科の看板を掲げて居る病院に、両者の独立を要望する何等かの具体的方法を私達は出すべき事が急務である。

終りに多年の御厚情を頂いて居た皮膚科関係の諸賢え、私信で御挨拶す可きであつたがあの当時諸種の事情で失礼して居たので、今日本誌をかりて御礼を申し、併せて愈々2ヵ年の準備時代も過ぎ1957年の輝しい年を迎え、大いに研究努力しようと張切つて居ることをお誓い申す次第である。

本 誌 の た め に

本誌2巻, 4号に市川教授は此の種の専門雑誌が多過ぎる様に述べられた事を読んだが、私はそうは思わない。「外科領域」は別として、泌尿器科だけの雑誌は本邦に本誌と学会雑誌の二冊あるに過ぎない。他の二冊は皮膚科と合同である。両科の分離が問題となつて居る今日、非常に微々たる事であるかも知らないが、こうした事はどんなものであろうか。「雑誌位は」と言われる方が居られるかも知らないが、かかる事も分離問題に悪影響を及ぼして居る事を私達泌尿器科医は知る可きではあるまいか。私みた様な関係で独立した者は殊更にそう感ずるのである。甚だ勝手な言い分であるが、ただ私が本誌に希望する事は本文を欧文(英, 独, 仏, 伊, 西, 露いづれでもよい)にして、抄録を和文にしたい度い。或人は言うかも知れない。Urologia internationalis があるから別にそうしなくつてもと。然し之は優秀な論文でなければ掲載して頂けないので、つまらない論文でも外国人が読んで呉れる日本の専門の欧文雑誌が欲しいのである。欧文抄録ではとても外人は読んでくれる筈がない。各大学で夫々欧文雑誌を出して居られるので、必要ならばそれに掲載すればいい様であるが、此種の雑誌が外国に渡つて将して何人に読まれて居るやら。部数に制限があるから大した事もあるまいと想像される。私は外国人がよんでくれる専門雑誌がほしいのである。日本語が国際語になつて居ないならばぜひそうした雑誌が必要で、之で始めて文化の交流と云う事もあり得るかと思われる。現在私の教室に来て居る泌尿器専門の外国雑誌は6冊であつて、本年より別に2, 3冊追加する様にして居るが、之では交流どころか依然として押され気味である。

本誌は内容も充実しているし活字、体裁其他上品な感じのいい雑誌であるが、1957年の年頭にあたつて稲田教授に以上の事を特に御願ひ致して置き度い。そして益々本誌の御発展を御祈りする次第である。